

繪はがき

泉鏡花作

全一章

九月十日、名古屋の金色夫人（KW・夫人、金色夜叉を愛誦して殆ど癖を成す、故に人此名を呼ぶ）より安産の吉報あり。この音づれ朝疾く来て、女中わが寢床に齎らす、急ぎ二階の雨戸を放けさせれば、しのゝめの露繁き一叢竹の梢に三みて、枕もとなる。小さき欄に及ばんばかり、瑠璃、紺、浅黄、薄紅の花色々にいみじう咲いたり。これ今年庭の朝顔を看るはじめ也。

さて返しには繪葉書をと、午後木挽町の清方子を訪ひ、今朝の風情をそのまゝに寫してんと思ひしが、朝顔の盛久しきも、露の命なんど云へば、祝儀には忌むべき也。やさしきは撫子の花こそと品定する傍より、子の母刀自の言ふ。あの花は芝居の幽霊の裾模様すそもやうに附けるのですよ。あゝ、さらば様に依るとも吉例犬張子乎と、請うて其形を畫き、産屋の色ど

りにと、めでたう祝^{いは}ひ参^{まゐ}らせけり。